

[5]祈りを Break する： に思う事。

「シャロンさん」へ「片目のダヤン」より。

貴女が**上野千鶴子さんの文章**「父親への反抗心から、祈りを離れた。祈っても、祈らなくても、受難は訪れた。理不尽な暴力、不当な差別、言葉にならない無念さを前にして、ただ『共に祈りましょう』と無力に唱えるのはナンセンス。禁句とした』」に対して、先週の「[5]祈りを Break する」に書かれていた事に関する、私なりの思いを述べさせていただきます。

「祈りの前提として思う事」

旧約の最大のテーマの一つは、他民族による受難/民族崩壊の危機の中で「神は顕現されて、我等を救って下さるはず」です。ユダヤ人は4000年間、義(律法の遵守)の祈りにより、選民意識と再建希望を保持し続けてようとしてきました。「祈ろうが、祈らなからうが、創造主/神は存在する。賛美する対象は存在する。創造主が存在するから賛美し、祈りをする」、これが答えです。このコンフィデンス(確信)が持てなければ、上野さんの言うように「祈り」は無意味である、と、私は思います。

「祈り」は、人間として最大限の努力をして、なおかつ創造主に人で得られない最善の恵み、愛、を期待すること。祈りは希望。努力をしない者/いい加減な気持ちの者/無気力な者/無信仰な者/では神は答えてくれないでしょう。真剣な、誠実な、純粋な祈りが「祈り」であります。高慢さを捨てて人間の弱さに気づく純粋さが必要と思います。「祈り」には、この前提条件が必要ではないかと思えます。

“Blessed are the pure in heart, for they shall see God.” {Mat.5.8}

「心の清い人々は、幸いである、/その人たちは神を見る」(マタイ伝5.8)

従って、「理不尽な無念さを前にして、何の努力もせずに、ただ『共に祈りましょう』と無力に唱えるのはナンセンス」は、そのとおりでしょう。

「上野さんのフェミニズムと祈りについて思う事」

私たちはそれぞれ異なった賜物を持っているから、当然に個人差はあります。感受性、行動力、忍耐力、当然に差はあります。上野さんが彼女の賜物としてフェミニズムを強調した生き様を貫いてきており『生き延びるための思想のあとがき』を書いた時に、フェミニズムのアンチテーゼとして、祈りを否定する表現となったのはそれなりに理解できます。**フェミニズム**を強調するのが主体で、**祈りの否定**は付け足し表現であり、あまり気にする必要は無いと思います。彼女のフェミニズムは京都時代から変わっていないし、女性陣にとっては強い味方ですから。

「わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物をもっていますから、預言の賜物を受けておれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、勤める人は勤めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい」(ローマ 12.6-8)

「上野さんの思い出」

彼女は根暗な努力家で、一途に上昇志向の強い秀才、富山人の典型。私は大学時代の教養部同期生で、当年還暦です。覚えているのは、入学したての一回生女子でありながら、全学自治会委員選挙に反主流派ブンドから立候補し当選した事。男から見ると愛の理解不十分なキツイ女性フェミニストの典型のように思います。

「上野さんの祈りの復活」

彼女もいずれ時がくれば、又、信仰が復活し、真剣な純粋な祈りが戻ってくるでしょう。何事にも時があると思います。高慢にならず、人としての限界を感じる時期がこないと祈りの姿勢は生まれません。祈ることによりパウロさんの言っているように弱点が強点に転化し、聖霊の導きにより信じられないパワーが与えられるかもしれない。しかし、時期が来ないと祈りの姿勢にはならないでしょう。神と個人は一對一でつながっており、必要な時期がくれば、彼女も祈りを求められるでしょう。

「何事にも時があり、天の下の出来事には全て定められた時がある。生まれる時、死ぬ時、植える時、植えたものを抜く時、-----愛する時、憎む時、戦いの時、平和の時」(コヘレトの言葉 3.1-8)